

京都市子どもの読書活動推進のための取組指針

R8年3月

- 本を多く読む子どもが増えている一方で、本を読まない子どもが増えており、二極化が進んでいる。
- 読書が好き、大切と思う子どもの割合は、どの校種でも高く、読書に対して肯定的な意識を持つ子どもが多い。
- 一方で、読書をしない主な理由は、「本を読む時間がない」、「読みたいと思う本がない」、「本を読むことに興味がない」が挙げられ、子どもたちが主体的に読書に向かうためには、子どもが読みたいと思う本との出会いをつくること、読書への興味・関心につながる取組を行うことが大切である。

家庭

子どもの読書習慣は、日常生活を通して形成されるものであり、最も身近な存在である保護者の果たす役割が非常に重要である。
本市では、発達段階に応じて、家庭での読書に親しむ取組ができるよう、地域・学校等とも連携し、環境づくりを進める。

地域

子どもがより多くの読書の機会に恵まれるために、地域が果たす役割は非常に大きい。
本市では、公共図書館をはじめ、児童館や子ども文庫、読み聞かせボランティアグループ、PTAサークル、書店等の様々な機関・団体等と連携しながら、子どもたちが本とふれあう機会を創出するため、環境づくり、人づくりを進める。

学校等

学校等※は、多様な背景をもつ子どもの状況を踏まえ、全ての子どもが生涯にわたって読書に親しみ、読書を楽しむ習慣を形成していくうえで大きな役割を担う。本市では、発達段階に応じた切れ目ない適切な読書支援や、学校図書館の活用など、子どもたち自身が主体的に読書に親しむ取組等を進める。

※学校等：保育所・認定こども園・幼稚園・小学校・中学校・小中学校・高等学校・総合支援学校

発達段階		特徴	大切なこと
乳児	幼児	周りの大人から言葉を掛けてもらったり、乳幼児なりの言葉を聞いてもらったりしながら言葉を次第に獲得するとともに、絵本や物語を読んでもらうこと等を通じて絵本や物語に興味を示すようになる。さらに様々な体験を通じてイメージや言葉を豊かにしながら、絵本や物語の世界を楽しむようになる。	周りの大人から言葉を掛けてもらいながら、言葉を獲得していくため、肌の温もりや声の優しさを感じられるよう、スキンシップを意識しながら、絵本の読み聞かせを行うことが大切。
			絵本の読み聞かせは、親子の絆を深めるだけでなく、言語能力の発達につながる。美しい言葉や韻を踏んだ言い回しなど、子どもに出合わせたい言葉が使われていることが多い、語り継がれている作品などを通して、いろいろな言葉に親しめるようにすることも大切。
小学生	低学年	本の読み聞かせを聞くだけでなく、一人で本を読もうとするようになり、語彙の量が増え、文字で表された場面や情景をイメージするようになる。	読み聞かせも続けながら、自分で読む楽しさの体験を重ねていくことが大切。学年が上がるにつれて幅広いジャンルの本に親しみ、読書活動を通して自分の考えを広げたり、深めたりしようとする態度を身に付けていくことが大切。
	中学年	最後まで本を読み通すことができる子どもとそうでない子どもの違いが現れ始める。読み通すことができる子どもは、自分の考え方と比較して読むことができるようになるとともに、読む速度が上がり、多くの本を読むようになる。	
	高学年	本の選択ができ始め、その良さを味わうことができるようになり、好みの本の傾向が現れるとともに読書の幅が広がり始める一方で、この段階で発達がとどまったり、読書の幅が広がらなくなったりする者が出てくる場合がある。	
中学生		多読の傾向は減少し、共感したり、感動したりできる本を選んで読むようになる。自己の将来について考え始めるようになり、読書を将来に役立てようとするようになる。	読書をする子としない子の二極化が進み、読書習慣の継続が難しくなる時期。友人との読書体験の共有やメディアを活用した読書の促進（映画原作、SNSで話題の本など）が効果的であり、小学生期までの読書習慣が途切れないよう、子どもの主体性を大事にしながら読書支援をすることが大切。
高校生		読書の目的、資料の種類に応じて、適切に読むことができる発達段階に達し、学術論文や専門書なども含め、自己の進路や興味・関心に応じた読書を行うようになる。	勉強・部活動・課外活動への参加等様々な理由から、幅広い読書をする時間の確保が難しい生徒が多くなるが、読書を自らの人生を豊かにするものと捉え、今後のライフステージに応じて本を読む力や、読書に親しむ姿勢を身に付けることが大切。

現状と課題

取組主体の役割

子どもの発達段階における読書に関する特徴や大切なこと

京都市子ども読書活動推進のための取組指針

基本方針 1

全ての子どもへ読書に親しむ機会の提供

家庭環境や社会経済的背景、障害の有無等にかかわらず、全ての子どもに本との出会いの機会を充実させることを目指す。

基本方針 2

子どもの発達段階・発達特性や社会の変化に応じた読書環境の充実

乳幼児期から高等学校段階に至るまで、子どもたちが自分に合った形で読書に親しむことができるよう、学校図書館や京都市図書館の整備、情報発信の工夫、デジタル社会への対応など、読書環境の整備・充実を図る。

基本方針 3

子どもの読書活動を支える大人への啓発・理解促進

子どもの身近にいる大人が、子どもが読書することの大切さに対する理解や関心を高めることが大切であり、保護者や学校等にとって、負担感なく取り組める工夫や、子どもが本を読むことの価値を実感できる情報を様々な機会を捉えて発信する。

基本方針 4

京都ならではの魅力に親しむ読書活動の充実

京都の魅力への理解を深め、その良さを他の地域、世界に発信し、次代に継承していくためにも、京都の伝統文化や歴史、古典文学に加え、京都が育ててきた先進性など、多様な郷土資料の充実が大切。新たに、京都の文化資源を活用した体験と結びつけた読書機会の充実を図る。

基本方針 5

生涯にわたる学びにつながる読書習慣の定着

読書は子どもの知的好奇心を刺激し、新たな世界への扉を開くものであり、大人になっても学びを続け、人生をより豊かなものとするために、子どもの時期での読書習慣を形成し、生涯にわたって読書を楽しむ習慣の定着を目指す。

基本方針

主な施策

- 京都版ブックスタート事業の実施
- 年代別ブックリスト「本のもり」の作成・周知・掲載本の展示
- 親子で本に親しむイベントの実施
- 発達段階に応じた読書に親しむ機会の充実
- 学校図書館を活用した学習活動の推進
- 中高生対象に本や図書館利用促進に向けた取組の充実
- 学校・園のニーズを踏まえた京都市図書館との連携の充実

- 幼稚園・保育所等の絵本室における保護者・地域のボランティア等による運営、園児への読み聞かせの実施
- 京都市図書館内の読書環境の整備
- インターネットを活用した中高生の興味関心を引く情報の発信
- 京都市図書館司書等対象の「子どもの本コンシェルジュ」の養成
- 障害のある児童生徒の図書館・学校図書館利用の充実
- 総合支援学校でのICT機器等を活用した、一人一人の特性に応じた読書環境の整備・充実
- 学校司書・図書主任・司書教諭の資質・指導力の向上
- 地域に開放している学校図書館の運営

- 妊娠期も含めた保護者への、絵本・児童書の読聞かせや読書の大切さを伝える取組の充実
- 子どもの読書活動の推進に資する広報・啓発の充実
- 児童館での読み聞かせ活動の充実
- 関係団体と連携した、幅広い世代の人への読書の楽しさや重要性を伝える啓発の充実
- 子どもの読書の推進に関して優れた実践を行っている団体（個人）の表彰と取組の発信

- 子どもが京都の文化（伝統や先進性）、古典文学などに親しむ取組の実施
- 学校図書館への京都関連図書整備

- 発達段階に応じた読書に親しむ機会の充実（再掲）
- 各学校における読書活動の取組奨励・推進
- 関係団体等と連携した、幅広い世代の人への読書の楽しさや重要性を伝える啓発の充実（再掲）
- 子どもが京都の文化（伝統と先進性）、古典文学などに親しむ取組の実施（再掲）

- 主な取組主体
- : 家庭
 - : 地域
 - : 学校等

R7年度

本を読むことが好き、どちらかといえば好きな児童・生徒の割合	小学生80.6%	中学生66.8%	高校生77.9%
本を読むことが大切だと思う、どちらかといえば思う児童・生徒の割合	小学生92.6%	中学生89.2%	高校生92.6%
平日に30分以上読書する児童・生徒の割合	小学生70.3%	中学生50.3%	高校生36.5%

状況把握のための指標

読書活動の